氏 名	荘島（湧井）幸子

（論文内容の要旨）

本研究は、自らの女性の身体に強い違和感を持ち、男性へと性別を移行することを望む、性同一性障害（gender identity disorder、 GID）を抱えて生きる当事者とその家族の経験に接近することを目的として、ナラティヴアプローチに依拠して行われた質的研究である。本研究は、以下の第1章から第10章によって構成されている。

第1章　問題

本研究の問題について検討した。問題では、GIDが精神疾患として成立した過程をGIDが病理化されていく歴史として捉えた。本研究では、医学におけるGID研究の一定の成果を認めた上で、3つの問題点を指摘した。3つの問題点は、順に、性同一性障害者であることが固定的に捉えられている、コンテクストが考慮されていない、事例報告にとどまっているという3点であった。そこで、本研究ではこれら3つの問題点を解決するために、質的研究のなかでもナラティヴアプローチを採用した。

第2章　本研究における理論的・方法論的視座

ナラティヴアプローチに依拠する本研究の理論的・方法論的視座を3つ提示した。ナラティヴ（物語・語り）とは、「広義のことば・言語によって語る行為と語られたもの」である。本研究では、①病いとしての性同一性障害、②共同構築される性同一性障害、③家族によって語られる性同一性障害という3つの理論的・方法論的視座から、GIDを重層的なコンテクストのもとで捉える。

第3章　目的

本研究の目的は、自らの身体や性別への強い違和感から、女性から男性へと性別を移行して「望む性」を生きるGID者1名とその家族の経験を、ナラティヴアプローチから理解することである。

第4章　方法

女性から男性への性別移行を望むGID者1名とその家族に4年間の縦断的インタビューをした。家族構成は、母親、父親、当事者、妹である。インタビューにおける語りの産出の文脈を提示し、聴き手である研究者の問いや感情の道筋を示す試みを行った。

第5章　研究1.「望む性」を生きる自己の語られ方

「病いとしてのGID」（視座①）に対応する。研究1では、女性から男性へと性別移行し、「望む性」を生きようとする当事者の語りから、GID者が人生の中で行う意味づけを捉え、「GID者」になっていくプロセスを追うことを目的とした。自己物語の視点から当事者の経験の意味づけを捉えた。その物語は、カミングアウト行為の前後で分けて語られていた。さらに、「研究の場」における対話プロセスの中には、カミングアウト前後の語りを媒体する「移行の物語」が存在した。

第 6 章　研究 2. ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析

「共同構築される GID」（視座②）に対応する。研究 2 では、インタビュー場面という語り手と聞き手の相互対話的状況において、GID 者がインタビュー場面における「いま、ここ」において自己をいかに呈示しようとしているのかを明らかにした。当事者の自己の構築プロセスでは、距離化行為が重要で、それは（1）他の GID 者との間で、(2)自己と身体との間で、(3)過去の自分との間で、(4)今、自分が GID 者として生きているということの 4 点で行われていた。

第 7 章　研究 3. ある性同一性障害者の語りにおける語り得ないものへのアプローチ

「病いとしての GID」（視座①）に対応する。研究 3 は、これまでナラティヴアプローチにおいて看過されがちであった語り得ないものに焦点を置き、GID 者が物語を新しく生成し、自己物語を編み替えていく行為にみられるダイナミズムを捉えることを目的とした。GID 者が感じる得体の知れない身体違和感は、GID 当事者に苦痛を呼び起こすものの、容易には物語化されない。GID 者は自らが GID であると自己物語ることができないまま苦しみ続けるという自己物語の困難に苛まれている者と考えられる。

第 8 章　研究 4. 性同一性障害者と家族の経験：人生イベントの羅生門的語り

「家族によって語られる GID」（視座③）に対応する。研究 4 は、GID の当事者と家族の辿った生き難さ、すなわち病いの経験に羅生門的手法を用いてアプローチした事例研究を行った。母子の羅生門的語りから、彼らが経験した 2 つの重要な人生イベント―不登校イベント・GID イベント―が浮かび上がった。イベントへの意味づけは母と子によって異なっていた。また、イベント間をつなげる説明物語も、子が GID であると認知した前後で、母子ともに大きく変化していた。他の家族成員によるイベントへの意味づけからも、家族成員がそれぞれの立場から家族に関与し続けている様相が明らかとなった。

第 9 章　研究 5.「私は性同一性障害である」という自己物語の再組織化過程

「病いとしての GID」（視座①）に対応する。当事者は、筆者と出会った当初、自らを GID 者と名乗っていたものの、4 年にわたるインタビューの中で、次第に自己を GID 者とは物語らなくなっていった。そこで、研究 4 では、GID 者として、いったんは医療のレールを歩み始めたものの、途中からその物語を歩まなくなっていった変容過程を語りから質的に捉えた。

第 10 章　総括的討論

本研究を振り返ってまとめ、各研究において生成されたモデル（仮説や理論）の上位モデルの生成を行った。事例研究によるモデル生成の意義について言及し、GID 者と家族の経験に関する上位モデルとして、3つの心理・関係的構造を生成した（くいちがい構造、つなぎの構造、はなれの構造）。これら3つの上位モデルが、当事者と家族のライフストーリーと照らしてどのように機能しているのか検討した。さらに各上位モデルを参考にしてGID者および家族への支援が考案された。最後に本研究で依拠したナラティヴアプローチの意義と課題、および展望を述べた。

氏 名	荘島（湧井）幸子

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、女性から男性への性別移行を望む性同一性障害（GID）者１名とその家族に４年間の縦断的インタビューをし、ナラティヴ（物語・語り）アプローチによって研究した成果をまとめたものである。

本研究では、①病いとしての性同一性障害、②共同構築される性同一性障害、③家族によって語られる性同一性障害という３つの理論的・方法論的視座から、GID を重層的なコンテクストのもとで変化プロセスを含めて多様に捉えた。本論文は、５つの研究によって構成された。

研究１では、女性から男性へと性別移行し、カミングアウトして「望む性」を生きようとする GID 者の語りから、当事者が語る自己の意味づけ方と移行プロセスを分析した。

研究２では、インタビュー場面という語り手と聞き手の相互対話的状況において、GID 者がインタビュー場面における「いま、ここ」において自己をいかに呈示しようとしているのかを明らかにし、「距離化」という概念の重要性を示した。

研究３では、これまでナラティヴアプローチにおいて看過されがちであった語り得ないものに焦点を置き、GID 者が物語を新しく生成し、自己物語を編み替えていく行為にみられるダイナミズムを、GID 者が感じる得体の知れない身体違和感として了解しようとした。

研究４では、GID 者の当事者と家族に焦点をあて、羅生門的手法を用いてアプローチした。母と子の語りから、彼らが経験した２つの重要な人生イベント―不登校イベント・GID イベント―が浮かび上がり、それぞれのイベントへの意味づけが母と子、それぞれの立場によって異なる様が明らかになった。

研究５では、GID 者として、いったんは医療機関にかかったが、途中から自分を GID と名乗ることをやめて、その物語を歩まなくなっていった変容過程をとらえた。

本研究の学術的価値は、次の点にあると考えられる。

１）本研究では、疾患として GID を扱う医学的アプローチや社会問題として GID を扱う社会学的アプローチとは異なり、性同一性障害を病む当事者によりそって共に歩みながら、４年間という長期の縦断インタビューを行った。そして、その人生経験がどのようなものであるか、その変化プロセスも含めて、その生の意味づけや苦悩の経験のライフストーリーを明らかにした。GID 者であるという経験は、人と人との関係性において「望む性」を生きようとするプロセスの中に立ち上がってくるものとしてダイナミックな変容過程のなかで明らかにされた。

２）本研究では、研究協力者のおかれたコンテクストや当事者の意味づけを重視するナラティヴアプローチを採用し、研究方法論においても新しい試みをした。

一事例のインタビューデータに対して、異なる理論的背景を持つ多種のナラティヴ方法論の手法を試みて、重層的なコンテクストからGIDを捉え直し、多様な知見を重層化して提示した。このようなアプローチは、今後のナラティヴ研究や質的研究の方法論に具体的な示唆を与えるものである。

また、当事者の語りの分析のみならず、当事者をとりまく家族の語りとの関連を羅生門的アプローチによってとらえた方法は、同じライフイベントが立場の違いによってどのように意味づけが異なるかを明確にし、ナラティヴアプローチのもつ長所を生かした研究法を提示したといえる。

３）本研究では、事例研究の意義を明確にした上で、事例を超えるためのモデル化を行い、ローカルな知見をインターローカルな知見へと開いていくための新しい試みを行った。

４）性同一性障害という、まだ学問的に十分に理解されていない問題に対して、その当事者や家族が人生のなかでその事態をいかに受けとめ、どのように生きにくさを感じているかを当事者の経験から浮き彫りにしたことにより、この問題の理解を深め、社会的・臨床的支援にも寄与すると考えられる。

本論文は、上記の諸点において学術的意義や独創性において高く評価されたが、次のような点も指摘された。

「性同一性障害」を、クラインマンの「病いの語り」の文脈のなかで考えるという研究スタンスは、それでいいのだろうか、その問題を「病い」や「医療」のなかに位置づける働きを強めてしまうのではないだろうか。筆者の枠組や解釈によって切り取った語りデータだけではなく、生き生きした語りの生のデータをより多く提示して、事例の姿をもっと浮き彫りにしてもよかったのではないだろうか。4年間にわたって縦断研究をし、その変化プロセスに寄り添ったことの意義や相手との関係性をより明確に提示してもよかったのではないか。提示されたモデルは、どのような利用の仕方がなされるのか、臨床支援との関係をより明確にしたらどうだろうかなどの諸点である。

しかし、このような問題は、本研究の学術的意義を損なうものではなく、筆者の今後の研究に大きく期待するものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成２１年 １月 ２７ 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。